

---

# 穴を掘る人

古賀春緒

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

穴を掘る人

### 【Nコード】

N1824G

### 【作者名】

古賀春緒

### 【あらすじ】

穴を掘る人による、日常への反抗とちょっとした冒険のお話。

私は真理が知りたいのです。

穴を掘る人の話をしましょう。

穴を掘る人は、穴を掘ることが仕事です。

穴を掘ることで、その日の食糧と寝床を確保するのです。

深く掘れば掘るほど食糧がたくさんもらえるので、穴を掘る人は朝から晩まで必死に働きます。

しかしたまにふと考えることがあります。

なぜ穴を掘っているのだろう、と。

そこで彼は上司に尋ねます。

「なぜ穴を掘り続けているのですか」

上司は答えます。「生きるためだよ」

穴を掘る人はまだ釈然としません。

「それはわかっています。でもそんな理屈ではどうにもならない、なんともいえない虚しさ、ときどき私の心を襲うのです。」

上司は少し苛立った様子で言います。

「キミはそんなことばかり考えているから、最近仕事の成績が良くないんじゃないか。いいかい、穴を掘る意味を考えたところで腹の足しにはならないんだよ。もっと建設的な所に頭を使いたまえ」  
上司との問答はいつもこんな調子でした。

そんなある時、穴を掘る人が空を見上げていると、一羽の鳥が飛んでいました。

穴を掘る人は思います。

鳥はいいな、空を飛んでどこへでも自由に行くことができる。

僕も鳥になりたい、と。

そこで彼はその鳥を呼び止め、言いました。

「僕も君たちの仲間にしてよ」

鳥は聞きます。「どういう意味だい？」

穴を掘る人は答えます。

「僕は鳥になりたいんだ。鳥になって自由に空を飛びまわりたいんだよ」

鳥はさらに尋ねます。「君は空を飛べるのかい？」

穴を掘る人はうつむいて首を振ります。

鳥は呆れて言います。

「じゃあ無理だよ。君を僕らの仲間にすることはできない」

穴を掘る人は鳥に尋ねます。

「空を飛べないと仲間になれないのかい？」

鳥は言います。

「そういうわけではないよ。でも僕たちは大陸を渡りあわなくてはならない。そのためには飛ぶことが必要なのさ。」

穴を掘る人はそれでもなお粘ります。

「今の生活から抜け出したいんだ。ついていくだけでも行かせてくれないか」

鳥は少し考えて、答えます。

「君は何かを勘違いしているよ。僕たちは空を飛ぶことができるが、自由なわけじゃない。群れの決まりを守らないといけないし、危険だっていっぱいある。それでもついてくるっていうのかい？」

穴を掘る人は、力いっぱいいうなずいて見せました。

いい加減今の生活にうんざりしているのです。

鳥は言いました。

「分かった。それじゃあ僕の上に乗るなよ。」

こうして穴を掘る人は、鳥の上に乗って群れについていくことになることになりました。

穴を掘る人は多くの国や都市を訪れました。

ある国で王様に会いました。

王様は穴を掘る人に聞きます。

「お前は何をする者だ」

「私は穴を掘る人です。今は訳あって鳥の仲間になろうとしていますが……」

王様は興味深そうに身を乗り出します。

「なんと、穴を掘る者だと。穴を掘って何をするのだ」

「何もしません。穴を掘るだけです。その見返りに生活に必要なものを与えられます」

「ほう、それは不思議なことだ。掘るだけで何かを取り出すことも何かを埋めることもせんとは。ただひたすら掘るだけ、そんなことに何の意味があるというのかね」

「意味はないかもしれませんが。しかし我々はそれをするので、生きることができます」

「ただ生きるためだけに、意味も分からず一生穴を掘り続けるというのか。それは生きているとはいえんな」

核心を突かれた悔しさで、穴を掘る人は言い返します。

「お言葉ですが王様。私は私の職業に少なからず誇りを持っています。現時点ではまだ、なぜ穴を掘っているか分からないかもしれませんが。しかし我々は、いつの日かその意味を知ることができることを夢見て、頑張っているのです」

「しかし今お前はその誇りを捨て、鳥の仲間になろうというのだらう」

穴を掘る人はそれ以上何も言えず、真っ赤になってうつむきます。

そして、今の自分がなんだか恥かしくなりました。

ある時は危険にも遭遇しました。

鳥たちの天敵である、タカに襲われたのです。

その時は事なきを得たものの、ただでさえ恐ろしい天敵に対して、人を乗せて飛ぶことは自殺行為に近いことであると、旅が進むにつれ穴を掘る人にも段々分かってきました。

ただ自由なだけではない鳥たちのルールも学びました。

エサは群れのボスから順に食べていき、下っ端が食べられるのは残りものだけでした。

穴を掘る人は足手まといであるという不安と、少しずつ込み上げてくる望郷心から、いつしか飛んでいる時も地面を眺めることが多くなりました。

そんなある時、目の前に見たことのある風景が広がってきました。長旅の末、ついに世界を一周し、もとの国へ帰ってきたのです。

鳥は地上に降り、穴を掘る人を背中から降ろすと、ゆっくり口を開きます。

「ここまでだ。お別れだよ」

穴を掘る人は訳が分からず、ただ眼を見開きます。

鳥は静かに言います。

「君を僕らの仲間にすることはできない。君は鳥にはなれないし、なるべきじゃない。君は穴を掘る人だ」

穴を掘る人は少しがっかりしました。しかし気を取り直して言います。

「旅の途中で僕も薄々気づいていたよ。僕は本当は鳥になりたかったんじゃない。現実から逃げたかったんだ」

さらに穴を掘る人は、ずっと気になっていたことを口に出しました。「僕は足手まといだっただろう。でも君は旅の途中、一言も文句を言わずに運んでくれた。どうしてだい」

鳥はにっこりと微笑んで言いました。

「今さら何を言うんだ。もちろん君が友達だからさ」  
穴を掘る人は目を見開いて鳥を見ます。

「また会いに来るよ」

鳥はそう言い残すと、背を向け飛び立っていきます。穴を掘る人はしばらくじっと動かず、鳥の飛んでいく背中を見えました。

彼の瞳は涙でいっぱいです。

悲しみとも喜びともつかない不思議な感情が、彼の心にしみわたっているのです。

穴を掘る人は今日も穴を掘ります。

しかし彼はもう虚しい気持ちになりません。

大切な何かを知ってしまったからです。

それが何なのかはつきりとはわからないけれど、それがあふる限り生きて行ける気がしています。

私は真理が知りたいのです。

そしてそれを今も探し続けています。

穴を掘る人の話は、その答えを探すひとつのヒントになるかもしれません。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1824g/>

---

穴を掘る人

2011年1月29日14時57分発行